

「言葉で治療する」鎌田實著 朝日新聞出版



ちばなクリニック小児科 浦澤 林太郎

日々の診療にあたる際、患者さんや家族とのコミュニケーションは欠かせない。いくら進んだ医療技術を提供したとしても、納得が得られていないならば虚しいものになってしまう。「病にかかったとき、患者さんと家族は医師や看護師にかけられる言葉しだいで、治療を受ける日々が天国にも地獄にもなる」と著者は述べている。コミュニケーションを図ることによって、安心感を得ることができる。患者さんの心に寄り添うことが大切になる。

著者が青年医師だった頃に、40代のがんの末期患者さんに「がんばろう」と声がけして病室を出ようとしたところ、涙を流されてしまった。がんばってきた患者さんがもうこれ以上ががんばれないと心を傷つけたのだ。「がんばろう」という言葉も、状況により相手を傷つけることもあるのだと著者は気が付いている。そしてシチュエーションに応じた言葉の使い方が大切であると述べている。シチュエーションを理解するためには、医療者側の想像力が必要になる。

患者さんへの説明の仕方により不安の与え方に差が生じることに触れている。「今の体の状態はとてもいいです。体力もあり、問題ないと思います。しかし、治療の経過のなかでは合併症が起きることや、大きな副作用が出る可能性があります。ご了解をいただきたいと思います」、不安の残る説明である。対して、「これからの手術や抗がん剤治療によって合併症や副作用が出る可能性はありますが、今の体の状態や体力ならば、まず大丈夫だと思います」、同じ内容の説明でも不安の与え方が少ない印象になる。言葉の使い方で患者さんに与える印象に大きな違い

が出ることに気を配るべきだと感じさせる。

患者さんからの言葉も大切である。「よくなったありがとう」「救われた」「感謝する」、このような言葉が医療を立ち直らせ、よくしていくきっかけになると述べている。医療者、患者さん双方向のコミュニケーションが大切である。

またいわゆる「ムンテラ」について述べている。正確には「ムントセラピー」で、「言葉で癒す」という意味である。相手の心理状況を考慮しながら、丁寧に分かりやすい言葉で、具体的に説明することが大切だと述べている。患者さんや家族を癒す気持ちを持ちたい。

本書の最後に著者なりの良医の条件が紹介されているので引用したい。

- ①話をよく聞いてくれる医師
- ②わかりやすく説明してくれ、つらい話でもショックを与えず伝えてくれる医師
- ③食事や運動や仕事等、生活上の注意をしてくれる医師
- ④必要があれば、ただちに専門医を紹介してくれる医師
- ⑤家族の気持ちまで考えてくれる医師
- ⑥患者さんの不安やつらさを理解してくれ、ここを支えてくれる医師
- ⑦ほかの医師の診察を快く受け入れ、情報をすぐ貸してくれる医師

忙しい医療現場であるが、以上の7条件を満たすように心がけたい。それが、患者さんの癒しや納得につながり、受ける側も提供する側にも良い医療となると考える。

本書を通して、日常診療でのコミュニケーションの大切さを改めて認識した次第である。